⑦

参考コースタイム：中蓮寺～大川山
勤労者山岳連盟・善通寺山の会

◆峠の石仏（いしぼとけ）の伝説

むかし、むかし讃岐の国に住む作造という者が阿波の国にある親戚の家に行ってごちそうになり、つい話がはずみ帰りがおそうなってしもうた。峠にさしかかった時、さっき別れた親戚の者が後ろのほうから「おーい、おーい待ってくれ」と追いかけてきた。「実は、別れた後思い出したんじゃが、おまはんひと風呂あびてゆっくり帰ってくれ」とせっかくの山道を追ってきてくれたので作造はこころよく引き返したそうな。そして風呂に入っていると親戚の者が親切に背中を流してくれたそうな。そこで、次に親戚の者が風呂に入ったので背中を流してやったのじゃが、いつまでたっても「もうよい」と言わんのじゃ。ゴシゴシいくらすっても返事がない。フウフウいいながら一生懸命背中をすっておると、うしろで「これこれ、おまはん何しとるんじゃ」と声がするので振り返ってみると、夜はすっかり明けて東の空はほのぼの白んでおった。声をかけたのは山仕事に出かける炭焼きだったのじゃ。なんと作造は、峠にある石の地蔵さんの背中を一生懸命てぬぐいでこすっておったのじゃ。これは峠に住むしょうわる狸の仕業だといううわさが広まってから峠を通る人もいなくなってしもうたそうな。

薬師さんの石仏

石仏峠
ベンチあり

峠の石仏（いしぼとけ）
ここには昔7本の松があり「7本松」と呼ばれていました。茶堂があり行きかう人にお茶の接待をしていました。

二軒茶屋：標高635m
広い休憩スペースあり

二軒茶屋
箸蔵街道の途中に位置する二軒茶屋と呼ばれている場所は、昭和30年ごろまでは「大国屋」と「福島屋」の2軒の旅館が営業して宿と茶店を営業していたことに由来するとしてますが、一説によりますとこの旅館は100年前にはすでになかったとの話もあり、地名の由来はもっと古いことかもしれません。ほかに民家が2，3軒あったそうです。今では茶店が姿を消し一軒だけ残った老夫婦の炭焼きもなくなりました。
昭和3年にトンネルが完成し鉄道が通じるまでは、ここを通る人は多く特に春と秋の「はしくら市」の時などはかなりの賑わいだったそうです。

いぼ地蔵
昔、このあたりは、樫の木の峰と呼ばれていたことから「かしの木の地蔵」の名前がついていました。ところがこの地蔵さんにお参りすると『いぼが治る』という噂が立って、いつの頃からか「いぼ地蔵」と呼ばれるようになった。

中寺廃寺
平安時代に栄えた山林寺院。
その存在は地元の人々に伝承されていましたが、記述されたものはなく永らく幻の山寺となっていました。近年の調査により仏堂跡や塔跡ほか、たくさんの珍しい遺物が出土したことから、大きな力を持つ山寺であったことが分かり、平成２０年３月２８日、国の史跡に指定されました。

東山峠登山口・638m
駐車スペース：3台程度
塩入温泉から車で約30分

東山峠（ひがしやまとうげ）
塩入峠とも呼ばれて、徳島県三好郡東みよし町東山と香川県仲多度郡まんのう町の境界です。阿波からは木炭や藍、讃岐からは米・塩・乾物がそれぞれ搬入されていました。借耕牛の往来も盛んで、塩入地区には取引所もありました。また、峠道は金毘羅参りにも利用され、東山から金刀比羅まで日帰りする者もいたそうです。
峠の側面は、いまでは少なくなった石積みの造りです。

樫ノ休場（かしのやすんば）/二本杉
猪の鼻街道が開通するまで、讃岐と阿波はいくつかの山越えルートがほとんどで、ふもとの芝生からこの峠に至る樫の休場線は、人馬交通の要路でした。近在で生産された煙草、木炭、肥料の搬送や借耕牛の通行も盛んで、小さいながら集落も散在しており、峠にはうどん茶屋も二軒あったそうです。別名の二本杉（六本が二本に重なって見える）は讃岐平野から遠望できるため、牛を貸す人も借りる人も阿波路を目指す格好の目印にしたといわれてます。
仲南町誌によると、盛んであった往来も明治末期の東山（ひがしやま）峠道、大正3年の真鈴（ますず）峠道、昭和4年の鉄道（土讃線）の開通により減少。2軒のうどん茶屋も、林田氏は大正初期に、上村氏は昭和4年にこの地を去り、以来無住となったといわれてます。終戦後も木炭の運搬や貸耕牛の往来は見られましたが、自動車の普及によりこの峠を通る人はほとんどいなくなってしまいました。また、昭和30年頃国有林の伐採に伴い二本杉も伐採される計画がありましたが、塩入住民の再三の請願によりこれを免れたといわれてます。

作成：２０２３．０３．２４　責任者：瀧下健二